

# 小学生も学べる場に

## ここにいるよ

沖縄子どもの貧困

③

### 第3部 学習支援 <3>

3月の高校合格発表の翌日、ある中学生の両親が初めて浦添

市立森の子学舎センターを訪れた。「子どもが毎回来しように通う姿を見て、ありがたさを感じていた」とを言い、ケーキを差し出した。

大城善江子館長(61)は「両親がそろって来てくれたことがうれしい。続けてきてよかった」と喜んだ。「親や家庭を想う『言わない』というルールをつくる、守ってきた職員たちの思いが報われた結果だった。

大城さんは一昨年末に「ニート(若年無業者)やひきこもりの若者の支援を続けてきた。10代後半から30代までを支援する困難な活動の中、「もっと早い段階からの関わりが必要だ」との思いで、NPOの指定管理地によ

る児童館運営を始めた。

沖縄は浦添市未定数のまま卒業する中学生の割合が他県と比べ突出して高い。文部科学省の2014年度学校基本調査では、進学も困難もしくは中卒者の割合が2・5%。全国平均の7%の3倍を越える。中卒や高校中退後に社会との接点がなく、就労などの支援が困難になるケースも後を絶たない。

大城さんは全員が高校に合格した児童所、無料塾の取り組みに手応えを感じている。「家庭の自己責任は解決しない。これからは高校に入った子を出退させない取り組みも大事。地域の子どもたちを地域みんなで守っていく」と力を込める。

## 早い段階で関わり成長促す



ある中3男子生徒は1月まで第1志望の高校を諦めていた。「どうせ無理だと諦めた」。

内中点に不安があり、合格の可能性が高い学校を運ぶつもりだった。だが出願直前、第1志望校を自指そうと決めた。好きなスポーツの部活で活躍する夢をどうしても諦めきれなかった。

「児童館でみんなで勉強するうち、少しずつ自信がついた。勉強が分かり始めたなら、自分でもやる気がしてきた」。

入試の間接には勉強と部活を両立して頑張りたいと熱意を伝え、志望校に合格した。「ここ」で勉強できたおかげ、夢を諦めなくてよかった」と喜んだ。

大城さんは活動中の生徒たちの変化に驚く。夏休みごろには自転車のまま児童館に入った。注意を促されていた。そんな様子を見出し、「受験の不安や緊張感が子どもたちの心を成長させた。一つ一つの通過儀礼が無駄ではない。安心できる居場所があれば、どんな子でも力

勉強する中学生を見守る大城善江子館長(61)と職員(左から右へ)浦添市立森の子学舎センター

を支援できるほどが小さく分かった」と実感している。

森の子学舎館は今年度から「森の子ステップアップセッション(もりすてっぷ)」と名称を変えて再活動した。学習支援の対象を小学生にも広げ、学校との連携も強める。加齢別のボランティアで講師を務めてきた2人は4月から職員に採用された。

大城さんは「いつまでもボランティア頼みでは駄目。事業化して職員に報酬を出し、長く活動を続けていきたい」と語る。

児童センターはこれまでの学習支援の活動に加え、将来を意欲したキャリア教育を取り入れる。各年代の子どもたちを継続して支援する新たなたちの居場所を目指している。

取材班・田嶋正徳

火・木曜日掲載